

原 著

障害児保育拠点園での園児の対人行動

奥山清子¹⁾ 花谷香津世²⁾ 板野美佐子³⁾

ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科¹⁾

就実短期大学 幼児教育学科²⁾

旭川児童院³⁾

(平成6年10月19日受理)

Social Interaction of Children Receiving Designated Mainstreaming in Nursery School

Kiyoko OKUYAMA¹⁾, Katsuyo HANATANI²⁾ and Misako ITANO³⁾

*Department of Child Welfare
Notre Dame Seishin University¹⁾
Okayama, 700, Japan*

*Department of Early Childhood Education
Shyujiitsu Junior College²⁾
Okayama, 703, Japan*

*Asahigawa Jidoin Children's Hospital³⁾
Okayama, 703, Japan*

(Accepted Oct. 19, 1994)

Key words : social interaction, behavior pattern, integrated education,
spontaneous activity

Abstract

The behavior pattern in a free play situation between normal and handicapped children was compared. The same developmental pattern could be seen from one-year-old to two-year-old normal children whose mental age is almost the same as that of the handicapped.

The style of the behavior pattern in social interaction was different between normal children and handicapped ones. In the case of normal children, isolated and onlooker behavior decreased. On the other hand, parallel and group behavior increased. Isolated behavior was observed mostly in handicapped children. The onlooker and paralleled behavior slightly increased.

The group behavior of handicapped children did not show any change, but the contents

of it were remarkable. The inner change was found in the spontaneous activity which occurred in the play. The mainstreaming will have a great effect on helping handicapped children learn the social skills in the nursery school.

要 約

障害児が健常児と同じ精神年齢である場合、健常児の発達の型にみられるような同じ遊びのパターンを示すかどうかを明らかにするため、障害児の精神年齢とほぼ同じ生活年齢の健常児を対象として対人行動を観察し比較検討した。

遊びの中で見られる対人行動の現れ方、スタイルは障害児と健常児とは異なっていた。健常児の場合、自由な遊び場面においては、1歳児から2歳児の間に、孤立的行動や傍観的行動は減少し、代わりに平行的行動や集団的行動の増加が見られることが明らかとなった。障害児の場合、孤立的行動が多いのがその特徴であるが、集団生活の経験が増すにつれ孤立的行動は減少し、傍観的行動や平行的行動は増加した。

集団的行動の内容を検討して見ると障害児も、健常児も同じ比率で、自らかかわる行動が増加していた。保育園の自由な遊び場面において、遊びへの自発的にかかわりという内的な転換が認められた。障害児の社会的学習効果の視点からも、保育園での統合保育の果たす役割は重要な意味を持つと考えられる。

緒 言

これまでわれわれは、岡山市の障害児保育拠点園において、集団生活の中で障害児と健常児がどのようにかかわっているかについて観察を行い、報告した。¹⁾その内容は、障害児同士のかかわりには、押す、叩く、引っ張る、だきつく、はがいじめをする、唾を吐くなどの攻撃的行動が高い比率で見られ、障害児が遊びの道具を奪われたとき、障害児は押し倒す、叩く、はがいじめをする、唾を吐くなどの行動が見られた。健常児が遊びの道具を奪われたとき、障害児を言葉によって、攻撃していた。これら攻撃行動の発生には、体格などの身体的状況、知的発達、言語発達、集団への参加経験、情緒の安定度などが関与していた。さらに、障害児の対人行動に変化を及ぼすと考えられる要因を探るため、障害児の対人行動を孤立的行動、傍観的行動、平行的行動、集団的行動の4つのカテゴリーに分けて観察したところ、自由な遊び場面における障害児の行動特徴として、ひとりで動き回る孤立的行動が顕著にみられた。

子どもの発達において、仲間関係が重要であることが認識され、近年、乳幼児の仲間関係や

社会性発達に関する研究は世界的に増大していることがRubin (1990)²⁾や遠藤 (1989)³⁾によって指摘されている。障害を持つ子どもも、持たない子どもも共に育ちあうことを目指す統合保育の考え方は注目され、一般の幼稚園や保育園でも受け入れられている。ノーマライゼーションの考え方が定着している欧米においては、障害児の仲間関係についての先行研究は多いが、日本において、障害児が仲間の中にどのように受け入れられ、成長しているかについての研究は少ない。健常児と障害児の対人行動を比較したものは必要とされている。

われわれは、個別指導や、小人数のグループ指導を取り入れた統合保育が行なわれている岡山市の障害児保育拠点園において、障害児の行動を継続的に観察しているが、このような場面において、障害児が健常児と同じ精神年齢である場合、健常児の発達の型にみられるような同じ遊びのパターンを示すかどうか明らかにすることを目的として、障害児の精神年齢とほぼ同じ生活年齢の健常児を対象とし、対人行動を比較検討した。

方 法

1. 対象は、岡山市障害児保育拠点園の3園に在園する障害児の精神年齢とほぼ同じ生活年齢の知的にも身体発育にも異常を認めない21名で性別および平均生活年齢は次の通りである。

1歳児 14名（男児8名 女児6名）

平均生活年齢：1歳6か月

2歳児 7名（男児4名 女児3名）

平均生活年齢：2歳7か月

障害児 5名（男児4名 女児1名）

平均生活年齢：5歳8か月

入園直前に児童相談所で判定された障害児5名の平均精神年齢は1歳7か月で、障害の程度は精神発達遅滞・軽度3名・中度2名であった。なお、障害児（4歳）については、継続観察を行っていた同一の5名の障害児について、1年前の11月の観察数値を用いて比較を行った。

2. 観察期間および方法

1, 2歳児および障害児の観察は、1993年9月16日より10月29日までの期間、午前9時から10時30分までの朝の自由遊び時間に複数の観察者により実施した。場面は屋外の自由遊び場面と、ままごとなどコーナー場面との2か所であった。園児1名について約30分間の行動を追跡、観察し、VTRで録画した。園児の行動の1分間を15秒単位で4場面に分け録画場面の10分間、40場面をParten(1932)⁴⁾の分類を参考にわれわれが作成した基準（表1）をもとに、孤立的行動、傍観的行動、平行的行動、集团的行動の4つのカテゴリーに分け、それぞれをさらに3段階、計12段階に分けて分類した。

結果と考察

1. 1歳児の対人行動の形態別出現頻度

1歳児の対人行動1120場面を形態別に見ると（図1）、一人遊びをする平行的行動が454場面、40.5%で最も多かった。これに続いて一人で動きまわる孤立的行動は248場面、22.2%、他児や保育者とのかかわりが認められる集团的行動は243場面、21.7%とほぼ同数がみられた。傍観的行動は最も少なく175場面、15.6%であった。保育者や同じ年齢の他の園児たちのそばで、一人

遊びをする平行的行動は最も多かったが、仲間の園児たちよりも、保育者への愛着は強く、保育者が移動すると遊びは止まり、保育者の後を追いかける行動が多く見られた。孤立的行動の内容は、一人で動きまわる単独行動が147場面、60%を占め、何もしないでじっとしている孤立行動は43場面、11%であった。集团的行動の183場面、75.3%は、保育者からの呼びかけによる同調行動であり、対人行動を起動させる要因となる保育者の重要性が認識された。

表1 行動の分類基準

孤立的行動	10 孤立行動
	11 単独行動
	12 単独遊び
傍観的行動	20 傍観行動
	21 注目・対物
	22 注目・人・現象
平行的行動	30 平行遊び
	31 模倣遊び
	32 接近行動
集团的行動	40 保育者による同調行動
	41 他児による同調行動
	42 自らによるかかわり

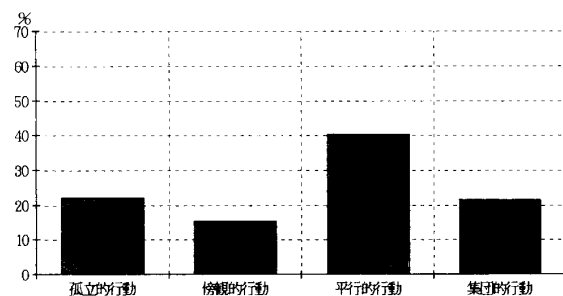


図1 1歳児の対人行動の出現頻度

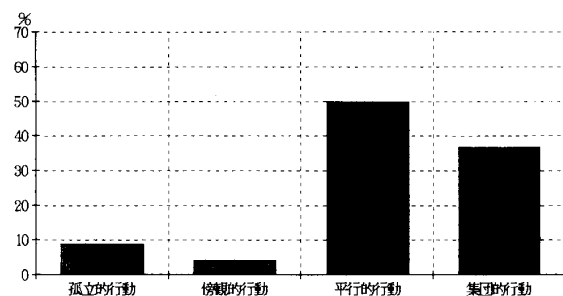


図2 2歳児の対人行動の出現頻度

2. 2歳児の対人行動の形態別出現頻度

2歳児の対人行動560場面では、平行的行動が280場面、50.0%で最も多く、対人行動の半数を占めていた。保育者への愛着は減少をみせ、保育者が移動しても、遊びが中断することはなかった。しかし、他の園児の行動には敏感で、同じ場面内で遊んでいた園児が移動すると、遊びの道具を持ったまま、移動する場面はよく見られた。集团的行動は206場面、36.8%であるが、そのうち保育者による同調行動は2場面、1%のみで、集团的行動のほとんどは自らによるかわりかきで182場面、88.3%であった。集团的行動の内容は、他児の使っている玩具を奪ったり、他児を押したり、他児から叩かれたりといったかわりがみられ、保育者だけでは果たせない同年齢の仲間の存在の重要性がうかがわれた。2歳児の対人行動のうち孤立的行動は50場面、8.9%であり、傍観的行動は最も少なく24場面、4.3%であった。保育者や同じ年齢の仲間とともにいるなかでの一人遊びの多さが2歳児の顕著な特徴となっている。

健常児の場合、1歳児と2歳児を比較すると、孤立的行動においては22.2%から8.9%へと13.3%減少し、傍観的行動は15.6%から4.3%へと11.3%減少していた。一方、平行的行動は40.5%から50.0%へと9.5%増加し、集团的行動は21.7%から36.8%へと15.1%の増加が見られた。これら4つの行動形態の出現頻度に差が見られるかどうか χ^2 検定を行ったところ、各行動形態別すべてに1%水準で有意差が認められた。健常児の場合、自由な遊び場面においては、1歳児と2歳児の間に、孤立的行動や傍観的行動は成長と共に減少し、代わりに平行的行動や集团的行動の増加が見られることが明らかとなった。

Parten(1932)を始めとして、Howes(1983)⁵⁾(1985)⁶⁾阿南(1989)⁷⁾の研究でも、健常児の場合は2歳児では、一人遊びか平行遊びにとどまっているのがほとんどであり、相手と1緒に遊ぶ連合遊び以上の水準のものは3歳以上になってやっと現れると述べているが、われわれの調査結果からも、1歳児においても2歳児においても平行遊びが最も多く観察され、協同遊び、連合遊びなどは認められなかった。保育者を中

心とした同年齢の仲間の近くにおいて、その近辺で一人で遊んでいるのである。

3. 障害児の対人行動の形態別出現頻度

障害児の対人行動400場面では(図4)、孤立的行動が162場面、40.5%で最も多かった。これに続いて傍観的行動は118場面、29.5%、平行的行動は82場面、20.5%であった。集团的行動は最も少なく38場面、9.5%であった。

健常児の場合、当然予想されていることであるが、対人行動は、発達に沿って、孤立的行動や傍観的行動が減少し、平行的行動や集团的行動が増加するというこれら4つの行動の出現頻度の変化となって、遊びの中に顕著に現れている。

これに比べ、障害児の場合、精神年齢をほぼ同じくする障害児の対人行動を生活年齢が4歳と(図3)、5歳の時点(図4)で比較してみると、4歳の時点で63.5%あった孤立的行動は、1年後には40.5%へと23.0%減少している。傍観的行動は13.0%から29.5%へと16.5%増加し、平行的行動も12.0%から20.5%へと8.5%増加していた。それらに比べ集团的行動はあまり変化は見られなかった。統合保育が始まった4歳の時点と、1年後の5歳の期間で、4つの行動形態の出現頻度に差が見られるかどうか χ^2 検定を

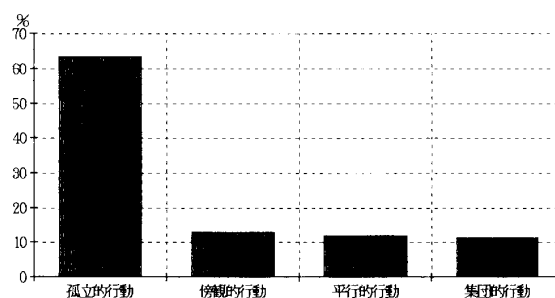


図3 障害児(4)の対人行動の出現頻度

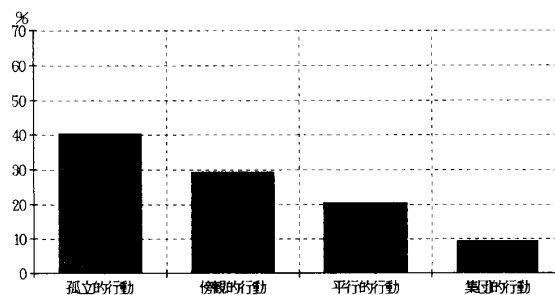


図4 障害児(5歳)の対人行動の出現頻度

行ったところ、集団的行動を除く各行動形態別すべてに1%水準で有意差が認められた(図5)。障害児の場合、自由な遊び場面においては、1年の集団生活体験のあいだに、孤立的行動の減少は顕著に認められている。障害児は一人で動き回る孤立行動が多く、障害児の対人行動の顕著な特徴となっている。しかし、障害児、健常児の遊びの中に入っていないが、仲間や周囲の様子を見ている傍観的行動が29.5%みられたこと、仲間の近くで遊ぶ平行的行動が20.5%に増加したことは注目したい。このように傍観的行動にプラスの変化が認められたことは、障害児が周囲への関心を示す行動の現れで、対人行動の成長が見られたと考えられる。

障害児が健常児と同じ精神年齢である場合、健常児の発達のにみられるような同じ遊びパターンを示すのではないかと考え、対人行動の形態別出現頻度を年齢別に比較した(図5)。健常児は、孤立的行動や傍観的行動は減少し、平行的行動と集団的行動が増加するというように、図5では右上がりの傾向を示すのに対し、障害児は、逆に右下がりの傾向を示している。障害児が健常児と同じ精神年齢である場合、健常児の発達のにみられるような同じ遊びのパターンを示すのではないかと考えたが、遊びの中で見られる対人行動の現れ方、スタイル、型は異なっていた。

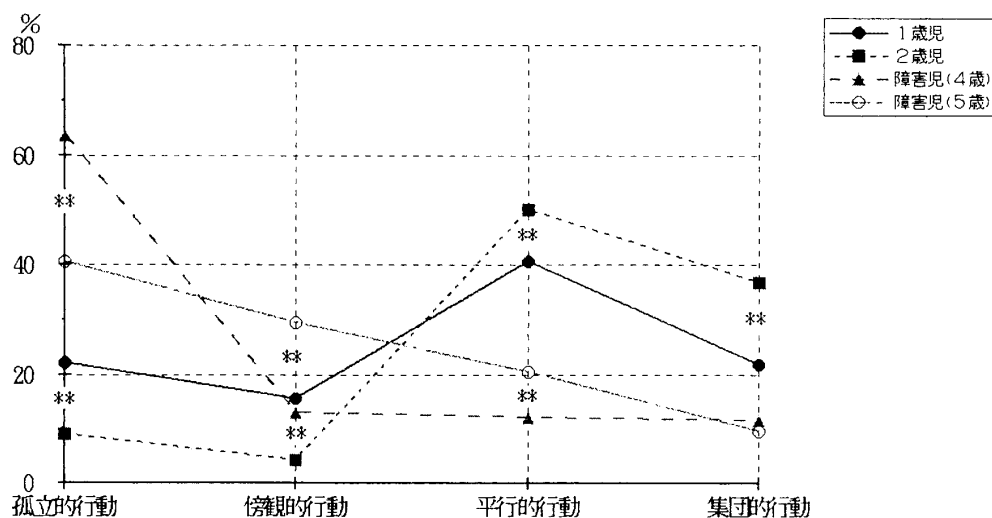
このように対人行動を全体から見ると、健常児に比べ、障害児は孤立的行動が顕著に見られ、平行的行動や集団的行動は少なかった。

表2 集団的行動の内容別に見た出現頻度

	上段 場面数		下段 (%)	
	1歳児	2歳児	障害児(4歳)	障害児(5歳)
保育者による同調行動	183 (73.5)	2 (1.0)	45 (98.0)	8 (21.1)
他児による同調行動	8 (3.3)	22 (10.7)	0 (0)	0 (0)
自らによるかかわり	52 (21.4)	182 (88.3)	1 (2.0)	30 (78.5)
合 計	243	206	46	38

集団的行動の内容を1歳児と2歳児の間で比較して見ると(表2)、保育者からの呼び掛けによる集団への同調行動は75.3%から1%へと74.3%減少していた。自らかかわる行動は21.4%から88.3%へと66.9%増加していた。他の園児による同調行動は3.3%から10.7%へと7.4%の増加が見られた。

同様に障害児の集団的行動の内容を4歳児の時点と1年後の5歳の時点で比較検討して見ると、保育者からの呼び掛けによる集団への同調行動は98%から21%へと77%減少し、障害児が自らかかわる行動は2%から78.9%へと76.9%



** p<0.01

図5 対人行動の形態別出現頻度

増加していた。健常児においてみられた他児とのかかわりは、障害児の場合は全く見られなかった。

このように、保育者からの呼び掛け、遊びへの誘いなど外的要因による遊びのかかわりから、1年間という成長の時を得て、遊びへの自発的にかかわりという内的な転換は、健常児においても障害児においても同様な傾向が認められた。これまでのわれわれの障害児の観察結果と重ね合わせて見ると、集団生活の中での社会的対人行動が徐々にではあるが形成されていると考えられる。保育園での統合保育を通して、健常児ほど顕著には見られないが、障害児は生活年齢が増せば、対人行動にプラスの変化が認められることがわかった。

結 論

障害児が健常児と同じ精神年齢である場合、健常児の発達に型にみられるような同じ遊びのパターンを示すのではないかと考えたが、遊びの中で見られる対人行動の現れ方、スタイル、型は異なっていた。

健常児の場合、自由な遊び場面においては、1歳児から2歳児の間に、孤立的行動や傍観的

行動は成長と共に減少し、代わりに平行的行動や集団的行動の増加が見られたが、障害児の場合、集団生活の経験が増すにつれ孤立的行動は減少し、傍観的行動や平行的行動が増加していた。障害児には自由な遊び場面において、1年間の集団生活により、孤立的行動の減少が顕著に認められた。

対人行動を全体から見ると、健常児に比べ、孤立的行動が多く、平行的行動や集団的行動は少なかった。しかし、集団的行動の内容をみると、保育者からの呼び掛けによる集団への同調行動が減少し、園児自らがかわる行動が増加していた。その比率は健常児においても、障害児においても同様の傾向が見られた。1年間という成長の時を得て、遊びへの自発的関わりという内的な転換が認められた。障害児の社会的学習効果の視点からも、保育園での統合保育の果たす役割は重要な意味を持つと考えられる。

本論文の要旨は、第3回中国四国小児保健学会(1994)において発表した。

掲筆するにあたり、調査にご協力いただいた障害児保育拠点園の諸先生方に感謝を申し上げたい。

文 献

- 1) 奥山清子, 花谷香津世, 板野美佐子(1993)障害児保育拠点園における障害児の対人関係. 川崎医療福祉学会誌, **3** (2), 59-65.
- 2) Rubin KH (1990) Peer relations and social skills in childhood -An international perspective. *Human Development*, **32**, 221-224.
- 3) 遠藤純代(1989)対人関係の発達. 日本児童研究所編, 児童心理学の進歩, 金子書房, pp224-253.
- 4) Parten MB (1932) Social Participation among pheschool children. *Journal of Abnormal and Social psychology*, **27**, 243-269.
- 5) Howes C (1983) Patterns of Freindship. *Child Development*, **54**, 1041-1053.
- 6) Howes C (1985) Sharing Fantasy : Social Pretend Pletend Play in Toddlers. *Child Development*, **56**, 1253-1258.
- 7) 阿南 文(1989)遊び場面における子どものルール共有過程. 教育心理学研究, **37**, 218-224.